

随筆



身の病は、人類文明の心の病か？
老人介護からみえてくる生活習慣病

勝山病院 老人内科
山城 竹信

秦の始皇帝は不老不死の薬を求め徐福を日本へ使わしたと伝えられている。人生の道のりで大病を患うことなく、死を迎えられたら、大方、親からいただいた自身の肉体に感謝するものだ。長生きを誇りにしていた沖縄は暖かくて住みよい島なので全国から羨ましがられるようである。沖縄県人として気高く生きるべきである。今、かかわっている仕事は、脳、心臓、肺、消化器などの疾患を患って寝たきり状態に近い70～90才代の方々のケアを中心とする病院での勤務である。そのように病んだ方々の病歴をみると、多くは40～50才代に肥満、高血圧、糖尿病などを含むメタボリック症候群や癌や脳神経疾患などの様々な病気の芽が噴出しはじめています。

太っている人、痩せている人、神経質な人、気難しい人といろいろなタイプの人とかかわりながら医療にたずさわっていると、よりよく人生を生きるにはカルテをとおして個々の生活史をのぞき、単にくすりの処方にとどめるのではなく、人生における病という生活史から未病への道をサポートする話を心がけることで、先々要介護を防ぐ一つの助けになるのではなかろうかと考える。

「人は生きてようにしか死ねない」とよく言われる。つまり人生には生きる手本が必要であり、その最も身近な存在が親で、その生き方の良し悪しから、すべてを学び、子供や孫へその意を伝えることで自分自身が変わり成長してゆくことになる。人生において子供と老人の病気は多くの人々の看護が必要とされる。医療の貧困さは制度として修正されるべきであり、現実の病は、医師をはじめとする医療スタッフの手を借りると共に身内または知人友人の支えを受けて自身の強き心で立ち向かってゆくべきものと思う。

団塊の世代は美しき国をつくるために社会を

円滑に動かし発展させるための知的技術や精神的財産を後輩へ教えてゆく責務があると思う。これも師弟である。小説「宮本武蔵」を書いた吉川英治は「我以外、皆我が師なり」と語ったと耳にしたことがある。人生すべて師弟でなりたっている。

その究極が親子という師弟であろう。団塊の世代は、親の恩を忘れてはいけない。特に介護の世界はその最たるものである。意思の疎通を欠くような状態の寝た切りの親であっても、命とは何なのか、生きる、または生かされるということは何なのか、ということを考えさせてもらえる時間のゆとりを介護する人に与えているのかもしれない。

この介護の体験は団塊の世代が子供や孫たちに伝えてゆくべき「チムグクル」であり、現実の競争の世界でも決して失ってはならないものである。美しき国をつくるための法律の整備とともに、人間社会の繁栄の礎としてあるべき規範を、すべてに恵まれた王子である「釈迦」はあえて難行苦行の実践の末、悟った法華経（人生すべてにありがとうという意味とのことらしい）を涅槃に至る中で弟子に伝えている。仏心で語られる「抜苦与楽」の心を介護という体験で勝ち得たときの「自らの命の喜びのエネルギー」として子や孫へ伝授すべき「心の財産」になるのであろう。そして、現代のすきんだ世の中で四十代から団塊の世代といわれる方々が文明病としての生活習慣の改善を地道な戦いによって勝ち取ることで未来を明るくする第一歩になるものと思われる。

図 介護の人的サイクル



週刊ほーむぷらざ 第979号 (2006.2.23)
「キラリ!女性のWorkスタイル」より転載